高山の文化を高めた人々〈13〉

飛騨で西川流日本舞踊を広めた西川文花師匠

（本名太田花子）

廣田照子

飛騨地方では日本舞踊会の草分けともいわれた西川文花師が、縁あって高山市に永住される様になったのは大正八年からの事でした。芸所の名古屋から是非飛騨で日舞を広めて欲しいとの願いを持った人達が白羽の矢を立てたのが文花師匠がまだ十六歳の時でした。名古屋にあっても優れた芸の持ち主であったことが認められたのでしょう。その後の師匠は、専心舞踊と三味線の修業を積まれ、昭和十年頃からはお弟子さんを持たれるようになられました。私が師匠にお弟子入りしましたのもこの頃でした。師匠の指導はそれはそれは厳しいものでした。

まだ幼児であった私は師匠の三味線の撥で容赦なく手足をうたれました。勿論舞踊のお稽古もお扇子で撥の代りに打たれる程に厳しいものでした。その頃、師匠のお弟子さんには行儀見習いが目的で、市長さんやお医者さんのお嬢さん始め、商家のお嬢さんなど各層の方々が大勢いらっしゃいました。日舞や三味線のお弟子さんを指導される一方、市民の方々に日舞を知っていただこうと発表会を精力的に実施されました。その第一回目は戦時中、「大政翼賛会」の行事に賛同され、現在のアリス平安閣の駐車場にあった「京極座」で開催されました。

峠の万歳

その後、宇野英太郎氏のご母堂様や他の方々と「西川流若葉会」を創設され、国技館や喜多座で毎年春と秋、昼夜二日間、温習会が開かれました。地方、衣装、かつら、顔師、小道具すべて名古屋から来て頂き、喜多座の温習会の時は江名子川迄観客の行列が出来て、場内は花道に座る程の混雑ぶりで大変な盛況が続きました。この若葉会は、師匠が亡くなる昭和四十六年まで三十六年間続きました。

また、高山市音楽連盟と一緒に軍需工場で働く産業戦士、食料増産に励む農村への慰問等、積極的に参加されました。

今と違い不便な交通事情でしたので、馬車に揺られ乍らの慰問行でした。杉崎駅から稲越まで、大雪の中を馬橇で行ったり、清見の大原、朝日の秋神などの僻地へは、トラックの荷台に乗り出かけたものでした。戦時下の日赤病院には傷痍軍人が沢山療養しておられましたのでその慰問もなさいました。この様な功績で、昭和四十一年十一月三日の文化の日、高山市文化協会から、女性で初めての文化顕彰を授与されました。

師匠の思い出は沢山ありますが、中でも印象深かったのは、岩滝に慰問に行った時でした。大きな農家のいろりのある広間にはゴザがしいてあり、灯りは燭台のローソクだけでした。舞いながら動く舞扇にローソクの灯りが揺らぎ時には消えたりしましたが、幻想的な雰囲気が忘れられません。

その頃、高山へ東京から疎開されていた当時の有名歌手、楠木繁夫、三原純子それに高山音楽連盟の方々と一緒に慰問されたときです。名活動弁士で有った藤森美水さんの司会、三味線、太鼓の小坂豊山さん、地方の杵家弥津奈師匠という豪華メンバーの演奏会での文花師匠の「獅子頭」は最高に魅力的でした。

昭和二十二年五月、戦後初めて国技館での温習会で「うつぼ猿」を踊られ、猿回し役の余りにも感情あふれる舞振りは、静かな会場から啜り泣きの声が聞こえ、今でも強く印象に残っています。その他に忘れられない舞台に「常盤津・蝸牛」「清元・峠の万歳」等、三枚目役の軽い舞踊を得意とされていました。それ程に古典の日本舞踊に情熱を燃やし、舞踊一筋に地道で懸命に生涯を強く生きられた文花師匠の計り知れない偉大さを誇りに思っています。

昭和四十三年十月二十二日高山市民文化会館で、若葉会温習会に「清元・山帰り」の舞台のあと体調を悪くされ入院されました。時折お見舞いに伺うとベッドの上で私に「照ちゃんワシはこのまま死ぬなんて絶対出来ない。嫁入りする子（弟子）にどうしても名前（名取りの免状）が欲しいと言われてオマハンより先に名前をくれた事は悪かったと思っているけどオマハンは一番古いのだからチャッと若い人の面倒をみてやってチョーヨ、ワシも何とか退院してもう一ぺん舞台に立ちたい」と、ぬけきらない名古屋弁の願いもむなしく帰らぬ人となられたのです。享年六十八でした。

文花師匠と筆者（昭和24年）